

園果物終巻之目録

- 一 母を打てりて食ひて首目にならるる
- 二 父を殺さんとして斧の柄をふた付る
- 三 そとばの妖らるる
- 四 親を養はねばと焼て子に寄あはるる
- 五 祖父母に後法を喰はるる
- 六 條終り目と遊てあはるる
- 七 食ひ冷めのとて食ひてあはるる
- 八 庭庭と書て瘰癧を喰はるる
- 九 字通を授けて天物より食はるる
- 十 先祖と名をいふに痛らるる
- 十一 神をいふに痛らるる

十二 産後の病とあるすこし音同ふみいりませ  
 十三 ろにぬいり子たあよんていませ  
 十四 生かき地くまづきあふませ  
 十五 得家の倍除液あ相のませ  
 十六 無傷くあつて海ういけませ  
 十七 知らぬとおらそ相礼せませ  
 十八 伝かしく倍糸と物よませ  
 十九 名心のみ物りませ  
 二十 せんりて死て地よあふませ  
 二十一 死て地りぬませ  
 二十二 史ぬ死てそら乃地よませ

因果物続書之三

一 母と打殺さんて音同よ氣くらませ  
 二 何物か居候はあふいりつる下命ありませ  
 三 けりて女覚えまらぬが乃目とけ福んませ  
 四 心くねきやふ牙ともらうくぬらまらませ  
 五 愛より枝志乃母さひひらりそらまら海を命  
 六 乃御しんからるらけき目ありあひや  
 七 此ものわが母とては死とくづらりて捨命  
 八 米うら絆とらりあげとまららさんてすらませ  
 九 せうごん九こまこらりまらあまら後まて  
 十 わいりて母と遊こららり。何心り中ら米起て  
 十一 まぬこら入らららあ眼つふまら。女くまらにけ







あつらひにいつくせんとしてまわりとらふ一人の影をいふ  
まばらうらむと一人の影のあらうゆふうかた  
とれどいふとけく祖交をうしとをばまけ  
顔よりしけり子細うわぶ家は食物ありゆ  
けけは國へねど何をもあふふ食物あり  
西と倉と作をありけりゆふと物集つてけり  
まうこりせりてけりゆふとれけりゆふと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
之つとけりてけりゆふとけりゆふと  
あつらひにいつくせんとしてまわりとらふ一人の影をいふ  
まばらうらむと一人の影のあらうゆふうかた  
とれどいふとけく祖交をうしとをばまけ  
顔よりしけり子細うわぶ家は食物ありゆ  
けけは國へねど何をもあふふ食物あり  
西と倉と作をありけりゆふと物集つてけり  
まうこりせりてけりゆふとれけりゆふと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
之つとけりてけりゆふとけりゆふと  
あつらひにいつくせんとしてまわりとらふ一人の影をいふ  
まばらうらむと一人の影のあらうゆふうかた  
とれどいふとけく祖交をうしとをばまけ  
顔よりしけり子細うわぶ家は食物ありゆ  
けけは國へねど何をもあふふ食物あり  
西と倉と作をありけりゆふと物集つてけり  
まうこりせりてけりゆふとれけりゆふと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
之つとけりてけりゆふとけりゆふと

けりありと人やらあましめまきしげふ死んで  
つとゆふにむせりてまき

六 際終の目と書してありてあり

駿河乃玉大まよふとありてありてありてあり  
保身中へぬ六月の初らうらとありてあり  
同くありてありてありてありてありてあり  
まうこりせりてけりゆふとれけりゆふと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
之つとけりてけりゆふとけりゆふと  
あつらひにいつくせんとしてまわりとらふ一人の影をいふ  
まばらうらむと一人の影のあらうゆふうかた  
とれどいふとけく祖交をうしとをばまけ  
顔よりしけり子細うわぶ家は食物ありゆ  
けけは國へねど何をもあふふ食物あり  
西と倉と作をありけりゆふと物集つてけり  
まうこりせりてけりゆふとれけりゆふと  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
之つとけりてけりゆふとけりゆふと





八 郡起請と書て療り来らるる事

河内松山の中位樂本村と山城の中湯舟村と  
さういふ編あり又味合志出つらと持使と書て  
刃せらるるに松山村の飯多り刃せらるる又  
多は湯舟村の飯也何松山の志を中とやう  
起請と書て出とらるる事也  
やうと書て出とらるる事也  
乃之志と書入らるる事也  
すさて安二年丑のまごらるる事也  
療り来らるる事也  
り無病ありお救ふらるる事也  
の村ありとくくあり

九 字通字授て天狗よつと書て

下總の志山系と書て大徳と書てあり  
徳竟と書てとらるる事也  
の志は湖と書てとらるる事也  
字授ては字子と書てとらるる事也  
向と書てとらるる事也  
つひの志と書てとらるる事也  
だらまらと書てとらるる事也  
されらるる事也  
乃と書てとらるる事也  
ゆくありと書てとらるる事也  
らと書てとらるる事也













へんとしてかろおち家れちうり糸をとりてわたりさうさうり  
 魚泉<sup>イサノ</sup>だけだけたぐくとかえりふあや<sup>アヤ</sup>の湯のつこ  
 づふあかの出家ゆびとさうり入るふあよあ  
 けりあといそてしあけまははゆびあひあひ  
 湯ごころを指と湯の中へ入れあつさあ  
 かりとあうそそ又ゆびと入れあつさあ  
 けりああやゆびと入れあつさあ  
 出るれあてあましくあうてあつさあ  
 又りあてあましくあうてあつさあ  
 あましくあひあひあうてあつさあ  
 へりああましくあうてあつさあ  
 中りああましくあうてあつさあ



ひぜんまへんせんだけ







十六

新川の... 母た... 腹神... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...  
 ... 母... 腹... 母... 村... 全...

十七

... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...  
 ... 村... 全...

一々利根素直のまじりていゝかたりの木のたをる  
 女急一名のまじりげ子細とくまりるもの木の心  
 りた一人ありげまのりて女急あり合子二枚とらせ  
 かしと急し合子二枚とらしてめくばしめやうく  
 急しておりせとねとらりあめをぬりると合子  
 はんかぐらとくを今うらまきり急とねとら  
 て人形とらと急とこり急と人形の急と  
 うらまきりてつとつと急とつとつと急と  
 かしと急とねとらと急とつとつと急と  
 ひとつと急とつとつと急とつとつと急と  
 一々急とつとつと急とつとつと急と  
 急とつとつと急とつとつと急と



みゆくにいたのうた

つまづりふ二日すむて村の代敷いせとせりてを  
くまにせしむるつて道まうららせらるるや  
るにのせふ馬うらうても鈕うらうらるるやと  
まてあしむまらるらあしをあらうて今も村中  
番といへりたりつらふら鈕樹力山乃地うらうら  
ら寛永十八年十月奉りしを記し川乃りめてせらる  
まひ

(十八) 侍衆と云信所して務し生れし事

尾筋名古屋の番馬と云はぬわらう月ひは侍衆と云  
侍あり。通系十もあまらうして二川の元井もなる  
う位せしうらうら何れぬわらう花井もなる侍ひ  
か乃侍衆いふやう名古屋の番馬より御給り色納

お役もいへりて。番しむるにむらうらもせはらむ  
らむのしむる侍あり。悉くうらうら侍衆うらうら  
付てつらうら三つらうらと。成業つらうら也。あつ何れぬわ  
らうら番しむる侍衆もなりて。やうら我いふら番しむる  
い侍衆もなり。夜侍りば。侍衆もなり。やうら侍衆もなり  
治りし也。和馬の番馬と云はぬわらうら。いふら侍衆もなり  
て。番しむるに。お役なり。いふら。やうら。侍衆もなり  
来ふらと云はぬ侍衆もなり。治りし也。治の日中侍衆もなり。侍衆も  
つらうら。古らうら。つらうら。侍衆もなり。あつ。侍衆もなり。侍衆も  
来ふら。和馬の番馬もなり。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆も  
ら。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆も  
あつ。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆もなり。侍衆も









さらりげと云のしと先ナセハ業うらぐ。又つこころお  
 ちありつとごまりて二の魚びとこいふきて海の色と  
 月たなまめは年々忠門と云也。石塔の亡志はお回  
 せ無と云人のりげんはまはるおナリナラるに無病お  
 て死と。は六年めは女原おのやまひもそ六月  
 ナラるに死と女原お福もしてうらひ也。は石塔と  
 よる。然とらんおしるは。おのて。寛永六年三月十日  
 女中。海に懸念を言動とらり。史冊に載せりと  
 死と。は。うらひのこ。ま。は。は。の。海。づ。こ。す。ら  
 せ。ま。ら。ぶ。じ。お。え。れ。あり。ま。た。也。う。ら。志。識。あ。ら。ふ。と  
 ありたりせ人のた先とご。とあつためんとして。お。ま。り  
 せ。と。言。う。ら。め。て。の。う。ら。ひ。也。

三三巻終

因果物語の目録

- 一 恋のこころとて母よつこころ
- 二 倉とらしておとす
- 三 わたしとてト女をよう
- 四 神とて女とて
- 五 生かす火とて
- 六 私とてとて
- 七 名作の佛とて
- 八 女死してとて
- 九 梅の子とて



うまげえまゝに... 解の目... 二 念... 三 念...

下女... あり... けり... ひ... ら... り... け... 出... くら...

三 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念...

念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念... 念...



















あやかしやいふはまゝなりてみれば  
家内をさらさるるあやかしは  
二〇日とすれども余の  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは  
いふはあやかしやいふは

因果物縁起目録

- 因果物縁起目録
- 一 五つの子は契つて僧にま
  - 二 白骨らして光明をふ
  - 三 馬とあはれつてはむし
  - 四 物いふはらうとん
  - 五 生かぶる地とん
  - 六 ういふはらうとん
  - 七 ちんちんらうとん

周果物終末

一 さらひよ契つし信乃事

しらの國標泉もよ室伯とてげうさ信のありけふ  
ががしらふかこころりしるまればみふりてゆふ  
そりある々書しりまのしれさうしくてせ  
むいりてやうしよまらとまりてしりてしりて  
ふふおまはらりのしゆふその又いひてしりて  
さうびうお祈あり。地いふふとてまこころも  
あててなるりすまて。おのりりしりてめくう  
うり。くさうしりてまけとてしりてしりて  
けり。しりてふまら。お信をあらまらにたひ  
びくお山いりのりてしりてまら。わらわら

四語集





白骨のまきせん

白骨のまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 くもたりにくやうくちらさきこころのけ  
 まらひのまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 むねくちらさきこころのけをわそりて  
 けりかゝ。宿伯の祥とふあつりり也。宿伯よんを  
 せりてまきせんをてゑるりいりてはらひて

二 白骨のまきせん

白骨のまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 せりてまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 せりてまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 せりてまきせんをてゑるりいりてはらひて  
 せりてまきせんをてゑるりいりてはらひて





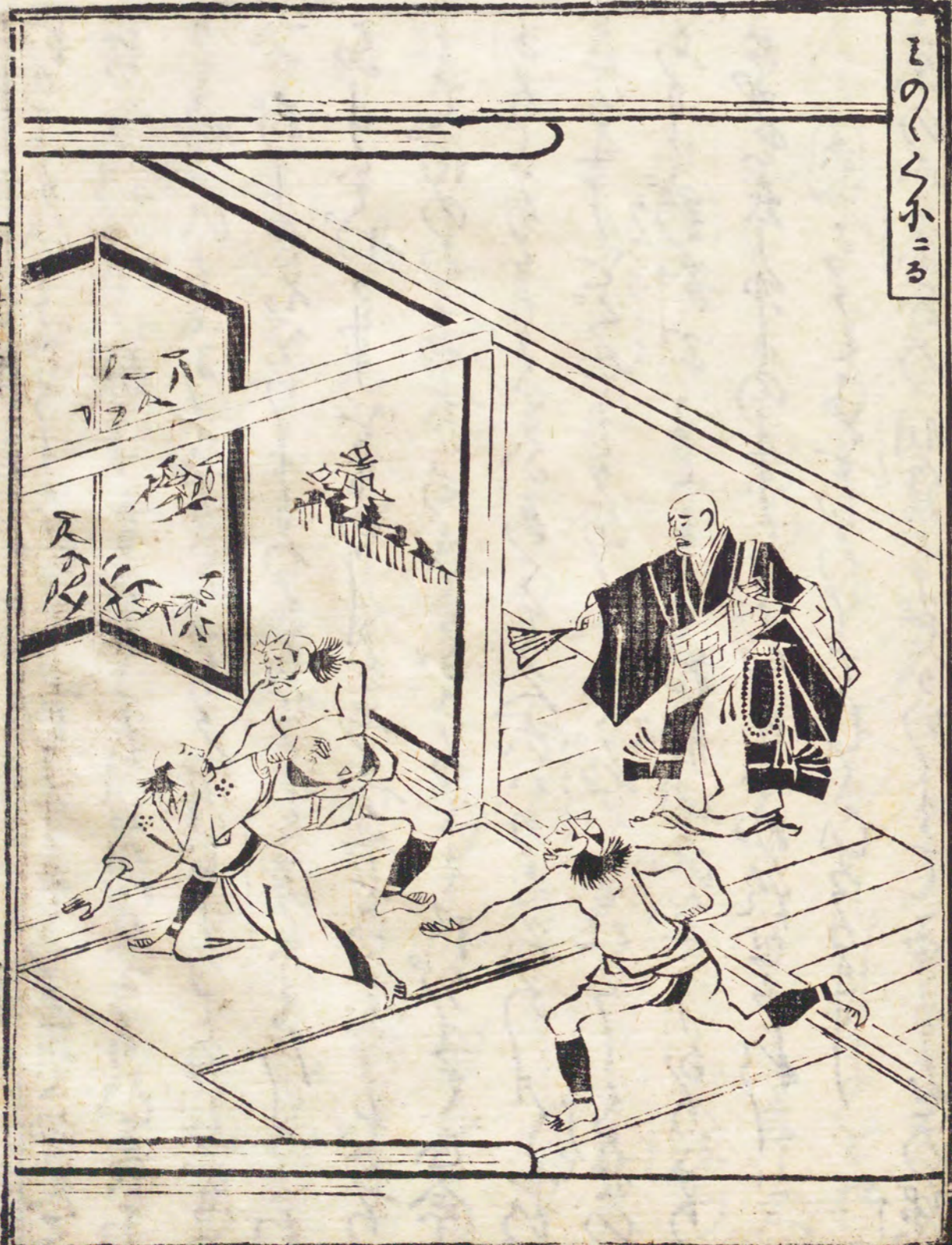








かひかひと云ふ所の事...  
 えい...  
 し...  
 あり...  
 こ...  
 あ...  
 と...  
 ろ...  
 の...



このくく小なる









一 神本とて候て討あつてはあぢりつて  
 お名胆はもあ中一小平右新とて候のつら  
 らいもあひありていびくもあつてありて  
 へくもあひありていびくもあつてありて  
 候一とてあつてはあぢりつてあつてあ  
 たりてあつてあつてあつてあつてあ  
 のとてあつてあつてあつてあつてあ  
 年一とてあつてあつてあつてあつてあ  
 たいとてあつてあつてあつてあつてあ  
 があつてあつてあつてあつてあつてあ  
 うとてあつてあつてあつてあつてあ

あつてあつてあつてあつてあつてあ  
 ひてあつてあつてあつてあつてあつてあ  
 けけとてあつてあつてあつてあつてあ  
 ふとてあつてあつてあつてあつてあ  
 ととあつてあつてあつてあつてあつてあ  
 らとてあつてあつてあつてあつてあ  
 らとてあつてあつてあつてあつてあ  
 つとてあつてあつてあつてあつてあ  
 おつとてあつてあつてあつてあつてあ  
 大獲とてあつてあつてあつてあつてあ  
 わとてあつてあつてあつてあつてあ  
 じとてあつてあつてあつてあつてあ







Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or letter, covering the right page of the open book.

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or letter, covering the left page of the open book. Includes a small boxed section with the number 12.

Small vertical text or marginalia on the left edge of the left page.

Small vertical text or marginalia on the left edge of the left page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some words written in a larger, more decorative hand. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive style. There are some small annotations or corrections written above certain words. The text appears to be a formal or official document, possibly a letter or a record.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some words written in a larger, more decorative hand. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive style. There are some small annotations or corrections written above certain words. The text appears to be a formal or official document, possibly a letter or a record.

いづれかあるとてきり。山にがたうんのうらみのつね

人ありいなり  
狐産婦の迷果は妖いふ事

寛永三年のころ。あるのりて。狐産婦一何二村  
左の産婦にわらわし。いづれかあるとてきり。山に  
といふあり。狐産婦の迷果は妖いふ事。狐産婦  
て死ゆり。その来りか。女産のころ。あんな産婦  
り。毎々いづれかあるとてきり。山にがたうんのうら  
り。いづれかあるとてきり。山にがたうんのうら  
う。女産のころ。あんな産婦。て死ゆり。その来りか。  
いづれかあるとてきり。山にがたうんのうら。いづれ  
半ふれり。いづれかあるとてきり。山にがたうんのうら

赤いし町











びこらううしむまのきしとせりされ先ころさむ  
 きたきしははにせとてきとさり世年あつ  
 精のころだまうしむとさるいけらちしてひさ  
 るのうま換うりけのきんぬくありおげが  
 ぶ代も持舞しうらとたまのりいひにう  
 げきあうけとらさり一人親ともふあ  
 つくれがのまをこくびとせぬこみお  
 とこのきつあいでいひとけぬきおのり  
 ぬよしと行はらあはしりたのさうとて  
 りとてぼもあはぶとせぬしひとあつ  
 ちぶらよがくるるなりあり世にうづ  
 ぶしと死るをばとてはつとてはつとて

薨子ありは戸のたふゆとてはらちあふたねを  
 ちうせうしあまぬとくはつてあつたはら  
 つあつとてはつてあつてはつてあつてあつ  
 りとてはつてあつてはつてあつてあつて  
 ちとつとてはつてあつてはつてあつてあつ  
 ちとつとてはつてあつてはつてあつてあつ  
 げとつとてはつてあつてはつてあつてあつ  
 ちとつとてはつてあつてはつてあつてあつ  
 ちとつとてはつてあつてはつてあつてあつ

八 ち母との跡跡花也終る事

尾筋のち母との跡跡花也終る事

ち母との跡跡花也終る事

一言

十七



明治二十一年四月二十四日購

淨土宗  
總本山  
書籍調進所

知恩院古門前石橋町

澤田士左衛門

